

平成 30 年度文京区アカデミー推進計画の点検・評価について

平成 28 年 3 月に策定した「文京区アカデミー推進計画」では、前年度に実施した事業の実施状況について点検・評価を行うこととしている。

平成 29 年度実施事業の点検・評価は、担当課からの事業結果報告に基づき、文京区アカデミー推進協議会（以下「協議会」という。）において実施した。この評価は、次年度に向けた既存事業の見直しや新規事業の検討など、今後の事業運営に活かしていくものとする。

第 1 回協議会

評価方法は、個別の事業の数値等による評価ではなく、前年度と同様に各委員からの意見・評言を協議会として取りまとめるものとした。

また、3つの分科会においても前年度と同様、分野ごとの平成 29 年度実施事業の実績や効果、課題等を確認しながら、ワークショップ方式により評価作業を進めた。

第 2 回協議会

各分科会の委員から出された意見・要望等を整理し、協議会の評価として取りまとめるとともに、審議を踏まえた学識経験者の意見を付記して、平成 30 年度における文京区アカデミー推進計画の点検・評価とした。

平成 30 年度 文京区アカデミー推進協議会経過

会議名	開催日	主な検討内容
第 1 回アカデミー推進協議会	平成 30 年 5 月 22 日	評価方法及び評価スケジュール
第 1 回分科会（スポーツ・文化芸術分野）	平成 30 年 6 月 5 日	ワークショップ方式による議論
第 1 回分科会（観光・国際交流分野）	平成 30 年 6 月 5 日	ワークショップ方式による議論
第 1 回分科会（生涯学習分野）	平成 30 年 6 月 11 日	ワークショップ方式による議論
第 2 回分科会（スポーツ・文化芸術分野）	平成 30 年 7 月 9 日	ワークショップ方式による議論
第 2 回分科会（観光・国際交流分野）	平成 30 年 7 月 3 日	ワークショップ方式による議論
第 2 回分科会（生涯学習分野）	平成 30 年 7 月 9 日	ワークショップ方式による議論
第 2 回アカデミー推進協議会	平成 30 年 7 月 31 日	協議会としての評価について

1 生涯学習

1 いつでも、どこでも、だれでも学習や活動ができる機会の提供・充実

〔取組状況の評価〕

平成28年度実施事業に引き続き、生涯学習の分野別目標に沿って、アカデミー推進課以外でも各課が様々な事業を実施している。また、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会（以下、「東京2020大会」という。）に関する事業を充実させている。

文京アカデミア講座は、公益財団法人文京アカデミーにより、区民のニーズに応えるために内容や回数等を工夫して多種多様な講座を提供し充実している。

図書館は、地域の学習拠点として、大学連携による大学附属図書館の区民開放、講演会、講座及び展示の実施など、サービスを充実させている。

〔課題と今後の対応・方向〕

参加者からの評価は高いが参加人数が少ない事業がある。周知が難しいという現実をふまえ、広報を工夫して、多様な年齢層・対象への周知のため、区報・チラシやSNS等をさらに効果的に活用することが期待される。

基本的な方向として掲げた「あらゆる立場の人たちに対応した学習支援の充実」を実現するため、聴覚障害者、視覚障害者、外国人居住者などへの支援について、今後さらに可能な限りの対応が必要である。また、予約システムのIT化により、効率化が図れる反面でIT弱者の方々への不利益が生じる可能性があるため、細心の注意を払う必要がある。

生涯学習相談窓口が開設され、1年間実施されたが、相談内容の要望や期待が出始めてきた。今後、その要望や期待に応え、効果的な相談を行い、生涯学習への参加を促すためには、区が実施する全ての課の事業、講座の情報を相談窓口を集約するとともに、特にIT弱者の方々には、紙媒体広報物（チラシやパンフレット）で手渡せる仕組みもつくるべきである。

区の行政情報にかぎらず、区内の大学で開催される講座情報、民間企業のホールの施設利用についても情報を集約して区民に提供することが期待される。

行政各課や民間機関との連携により、IT利用、資産運用、防犯・防災など、現代社会で区民が安全に生きるための講座の開設も検討されたい。

2 一人ひとりの学びの成果を活かす機会の提供・充実

〔取組状況の評価〕

基本的な方向として「主体的な活動を支える仕組みづくり」としては、昨年度に引き続き、生涯学習支援者を中心に活動が活発にされており、区民プロデュー

ス講座への応募実績が増えていることは、応募者への丁寧な相談の結果であると評価できる。

〔課題と今後の対応・方向〕

基本的な方向としての「人材育成・活用の推進」の一環としてオープンしたWebサイト、文京バックアップの可能性に期待する。

今後の対応として、多様な区民の力を活かすため、インタープリターのステップアップ講座、区民プロデュース講座の質的充実、各種養成講座の修了者の活躍を支援するための工夫、高齢福祉課とアカデミー推進課の連携による定年前の働き盛りの年齢層（ミドル・シニア）への人材養成講座の提供、若年層に対するアプローチなど、多岐にわたる努力に期待したい。

また、社会教育関係団体の制度を有効に機能させるため、各種講座修了後には自主グループ化と社会教育関係団体としての登録を促すとともに、平成31年度の更新時期を機に、既存団体が毎年の活動報告を提出するような仕組みをつくることも検討すべきである。

今後も、学習成果の発表やボランティアとしての活躍等の場を充実させることが求められる。

3 学びの継続を通じたまちづくり

〔取組状況の評価〕

ふるさと歴史館、各図書館、公益財団法人文京アカデミー（「文京学」講座）など、地域の特性を活かした事業に取り組んでいる状況が良く現れている。

特に、一部の講座では、受講した区民が後日講師となって自分たちの地域を他の区民とともに学び合うという双方向型、対話型の動きが出てきており、「学びの継続を通じたまちづくり」の一環として、とても良い広がりを見せている。中でも、「文の京十八の町物語を聞く」のように地域特性をその地域の区民が語る講座は、学びを通じた交流や仲間づくりに向けた取り組みとして評価できる。

〔課題と今後の対応・方向〕

地域アカデミーは、各講座の受講後などに受講者が主体的に結成するサークルや社会教育関係団体の活動を行う場所として、今後も本計画の基本的な方向に掲げている「学びを通じた交流・仲間づくりの推進」及び「地域で支える学習環境の充実」の場としての維持、発展に努められたい。

区民の学習活動とその成果を活かしたまちづくりの活動が、地域アカデミーを活用して循環的に発展していくための仕組みをつくっていくことが期待される。

【生涯学習分野評価の総括】

文京区アカデミー推進協議会委員（学識経験者）

生涯学習分野担当 田中 雅文

区民のニーズに応じた多様な学習機会と学習環境を提供するとともに、あらゆる立場の人たちへの学習支援、図書館の多様な事業展開に努力している。また、主体的な学習活動の支援や人材の育成にも熱心に取り組んでおり、まちづくりにつながる学習機会の提供や学習支援を実践している。これらの取り組みは、高く評価できる。

今後は、これらの取り組みを発展させるとともに、SNS活用やIT弱者等への支援の充実などを含め、あらゆる人々の学びを総合的に支援していくことが重要である。さらに、区民自身による多様な人々への学習支援、それらを通じたまちづくりの推進に力を入れることにより、学ぶこととまちづくりが、循環的に発展していくような仕組みがつくられていくことを期待したい。

2 スポーツ

1 スポーツを身近に感じる機会の拡充

〔取組状況の評価〕

東京ドームや講道館が区内にあることの地の利を活かし、オリンピック・パラリンピック競技大会やサッカー・ワールドカップ等のパブリックビューイング等を実施し、スポーツに触れ、スポーツに興味を持つことができる数多くの事業が展開されており、全般的に拡充が進んでいる。

特に、今回プロバスケットボールチームのトヨタアルバルク東京と協定を締結し、プロスポーツ団体との協働関係の強化とともに、プロスポーツの指導者等から区民が教わる機会も用意されるなど、質の高い技術や体験を提供していることは評価できる。

〔課題と今後の対応・方向〕

さらに、スポーツ団体、区内企業との協定を増やし、専門の指導者等から区民が教わる機会を用意できるとよい。

また、受験勉強が本格化する時期においては、中学生の部活動が様々な理由から制限されるなどの課題が存在する。これらに対して、自治体からアプローチすることは難しいが、課題が存在することは認識しておく必要がある。

2 いつでも、どこでも、だれでも気軽に楽しめるスポーツ活動の促進

〔取組状況の評価〕

多種多様なメニューのスポーツ教室や大会等を実施している。

また、東京2020大会に向けて、障害者スポーツの紹介や実体験できる事業も行われ、障害者スポーツの普及振興に努めていることも評価できる。

さらに、だれでもできるドッジビー、スポーツ吹き矢などのニュースポーツも、順調に広がっている。

〔課題と今後の対応・方向〕

多種多様なスポーツ事業はあるが、新規にスポーツを始めたい人にはどこで何が行われているかがわかりにくく、スポーツ指導者の派遣やパラスポーツについて、一般の認知が一定以上進まないという課題を抱えている。そのため、区内スポーツが一堂に会する機会や、スポーツフェスや他のイベントなどが行われる際には、スポーツ紹介のブースや相談窓口の設置、また指導者・プレイヤーなどの人物像をクローズアップしたヒューマン・ストーリーの提示などの広報活動が望まれる。

3 スポーツ活動を支える環境の整備

〔取組状況の評価〕

区内の小中学校を利用した交流ひろばなど、スポーツを気軽にすることができる環境の整備を行っている。

また、文京スポーツセンター改修工事期間中の対応として、区立小学校の体育館の貸出や文京総合体育館などを使用することで、全ての区民大会を実施することができた。さらに、文京総合体育館・文京江戸川橋体育館の稼働率が大幅に増えたことは、評価できる。

〔課題と今後の対応・方向〕

既に区内施設はフル回転しており、キャパシティは限界にきている。

現在、区内大学の諸施設を区が借りられるようになっているが、実績はない。今後のスポーツ振興のためには、文京スポーツセンター改修工事完了後も、区内大学施設を活用することで事業の拡大を検討するべきである。

4 スポーツを通じた仲間づくりと交流

〔取組状況の評価〕

スポーツ大会等で大学の部活と交流するなど、大学の多い文京区の強みを活かすことができている。拡充が進んでいる。

また、自治体交流事業や障害者向けの4区合同レクリエーション大会等を通じて、区外との交流も定常的に行われていることも評価できる。

さらに、「オリンピック・パラリンピックこども新聞」は、子ども記者が取材・編集を行っており、子どもならではの視点で書かれた紙面は、非常に興味深い。メディア・リテラシーの観点から見ても良い取り組みである。

〔課題と今後の対応・方向〕

東京大学や順天堂大学のほか、東洋大学や拓殖大学などの区内大学との連携協力を拡充しているが、引き続き他大学とも組織的で持続的な連携を図り、スポーツ事業の発展に努めてほしい。

また、東京2020大会でドイツのホストタウンとなる全国各地の自治体と文京区の間で何らかの事業連携が図れるとよい。

【スポーツ分野評価の総括】

文京区アカデミー推進協議会会長（学識経験者）

スポーツ分野担当 水越 伸

スポーツは、一定の場所や施設、指導者などの人材、チームや試合などの組織やイベント等があって初めて成り立つ。文京区では、文京スポーツセンターが改修工事中であったが、他の施設を使用することで全ての区民大会を実施することができ、文京総合体育館・文京江戸川橋体育館の稼働率が大幅に増えるなど、限られた条件の中で、全般的には極めて高い稼働率でスポーツ事業を進めていたことは評価できる。

一方、初心者や新たに区民となった人々が、スポーツに取り組もうとする際に情報を入手できるメディアや窓口をより充実させる必要がある。

また、自治体が、主体的に動いても直接的には解決できないような理由で、スポーツ事業の裾野が広がらない状況があることもまた確かである。それらに対しては、他の分野との連携を図りつつ、地道な努力を積み重ねていく必要があり、事業数をいたずらに増やさないようにしつつ、新機軸の導入も望まれる。

3 文化芸術

1 だれもが文化芸術に親しむことができる環境づくり

〔取組状況の評価〕

全般的には、活発に事業が実施されていた。カルタや能など、区内のユニークな人材や文化資源を活用した新たな取り組みがなされていることについて、評価できる。

例えば、演劇やコンサートなどの際に、子どもたちに楽屋裏を見せるなど、人々の興味関心を引き、参加を促すようなプログラムが多く、よくデザインされている。

〔課題と今後の対応・方向〕

子どもが参加できる事業については、年齢などに応じて適切な時間配分や体験内容について改善が求められる。

周知手段として、従前から実施しているチラシなどの配布も当然必要ではあるが、従来から関心がある層にしか届かない。昨今の時代状況に応じた情報環境の構築として、スマートフォンに対応したウェブの充実などの対応が必要である。

2 文化芸術を鑑賞・創造する活動の支援

〔取組状況の評価〕

全般的には、文京区らしい資産を活用した活動が多く、評価できる。

例えば、継続的に実施している事業提携楽団による楽器演奏指導などは好評を得ているが、これらは区民に対して、文化芸術の鑑賞だけではなく、表現や創造の機会を提供している。今後、この種の活動を増やしていくことが望まれる。

〔課題と今後の対応・方向〕

シビックホールをはじめとするシビックセンターの各施設の稼働率はおしなべて高く、大いに評価できる。一方で、一般利用の予約が難しくなっており、何らかの対応が必要であろう。

若年層の鑑賞・創作など文化芸術への参加が、全体的に少ないことから、鑑賞事業に参加を促すようなきっかけづくりや、興味・関心が持てる内容を検討していくとともに、若手芸術家の発表の場を積極的に作っていくことが望まれる。

3 「文(ふみ)の京(みやこ)」の文化を守り、伝え、活用する仕組みづくり 〔取組状況の評価〕

特に森鷗外記念館については、ファンや潜在的来館者を増やすため、開館5周年事業として館内外でイベントやシンポジウムなど様々な活動がなされていた。こうした取り組みは、森鷗外記念館に限らず、区内の様々な公共文化施設で試みられるとよいだろう。

〔課題と今後の対応・方向〕

文京区は、文化や伝統が豊かである一方、ややもすればステレオタイプ化された文化イメージ、伝統観にしばられてしまう危険性もある。それを回避し、引き続きより多くの人々に文化芸術活動に参画してもらうためには、新たな観点からの事業企画が必要であろう。

例えば、「文京区デジタルジャーニー」のような観光を目的とするサービス、サブカルチャー系の振興策などを文化芸術分野で積極的に活用していくことは、一つの方向であろう。

また、文京ミュージズマップなどを活用した事業や割引制度なども取り入れながら、新たな仕組みを作っていくことも必要である。

【文化芸術分野評価の総括】

文京区アカデミー推進協議会会長（学識経験者）

文化芸術分野担当 水越 伸

文京区の豊かな文化芸術資源を生かした多様な事業実践は、今回も健在であった。さらに、より多くの人々に興味を持ってもらうための新規のハンズオン（実際の作品や活動に手で触れ、実体験するような諸活動）も出てきており、評価できる。

いわゆる文化芸術の伝統的な鑑賞活動については、ほぼ行き渡り、飽和状態にある。諸施設の稼働率をこれ以上上げることは、実務上難しいであろう。

文化芸術についての古くて、ステレオタイプ化したイメージから脱却する必要性は、依然として残されている。そのために、スマートフォンなどのメディアと連動した、新たなサービスを導入し、結果として生涯学習、観光など他の分野と融合するような展開が出てくるとよいだろう。

4 観光

1 観光資源の発掘・保護を通じた文京区の魅力・個性の創出

〔取組状況の評価〕

文京シビックセンター展望ラウンジの観光拠点化事業は、一段と新たな魅力を創出したことで、来場者も増加し、観光資源を区内外に発信することができている。また、サブカルチャーによる観光資源の魅力発信が進み、多くの参加者を獲得したことを評価する。

他にも、観光ガイド事業など、様々なジャンルの事業を展開し進めていることを評価する。近隣自治体との連携の強化も行っている。

〔課題と今後の対応・方向〕

観光資源のさらなる魅力創出に向けて、区の特性を活かした体験型ツアーの企画や実施が望まれる。展望ラウンジのスカイビューラウンジバー開催については、定期的を開催してもよいのではないか。区内の神社や庭園などの日本文化にゆかりの深い場所を巡って、文化体験できるイベント等を行ってみてはどうだろうか。

また、様々な事業が実施されているが、方向性及びターゲットを明確にしたうえで、重複する事業や効果が低くなってしまった事業の見直しや整理をすることにより、施策全体のボリュームの再考も進めてほしい。

2 情報の収集・活用による来訪の促進

〔取組状況の評価〕

情報発信については、SNSの活用が図られ、文京区デジタルジャーニーが公開されるなど、ニーズに即しているが、今後とも技術の発達に遅れないようにしてほしい。

また、文京区とゆかりのある自治体との交流事業の実施は、相乗効果が見込まれ、観光資源の情報発信や活用にも一定の成果をあげている点が評価できる。

〔課題と今後の対応・方向〕

スマートフォンの普及により、訪れる人が自ら情報を収集・発信し、その分野に興味がある人たちに情報提供・拡散をする環境が整ってきている。今後、多様な世代のニーズの把握に努めたうえで、観光インフォメーションの強化を図るとともに、新たな取り組みとして、文京区に対する興味・関心を惹くような事業（例えば小学生から大人まで対象とした「文京区検定」）を展開していくことを検討してはどうだろうか。

3 持続可能な観光まちづくりを支える仕組みづくり

〔取組状況の評価〕

案内標識や区有施設、コミュニティバス「Bーぐる」などにおける多言語表記の取り組みが進んだことを評価する。また、外国人おもてなし隊育成事業によって、来訪者の急増が予想される訪日外国人へのホスピタリティの醸成に貢献している点の評価する。

〔課題と今後の対応・方向〕

東京 2020 大会を見据えて、観光まちづくりの方向性を明確にし、訪日外国人だけでなく、区外から訪れる様々な来訪者への対応を一層充実させていくことが必要である。外国人おもてなし語学ボランティアなどの発展的活用に期待したい。

【観光分野評価の総括】

文京区アカデミー推進協議会副会長（学識経験者）

観光分野担当 久松 佳彰

観光分野は、岐路に立っているように思われる。「区民の観光」に対するサービス提供・支援を超えて、区民以外の方、特に外国人による観光に対するサービス提供・支援という観点から、スピード感をもって各事業を点検する必要があるように思われた。また、情報発信についても、区報を重視する従来からの伝統的な発信方法を超えて、SNS等の新しい情報発信を存分に活用することが求められるように思われる。

この点から、サブカルチャーによる観光資源の魅力発信や、デジタルジャーニーなど興味深い先進的な事例が見られたことは喜ばしい。今後は、スクラップアンドビルドの精神で、新しい事業を行う代わりに、相対的に効果の低いと思われる事業は積極的に他の事業と統合ができないか、模索したほうがよいのではないかと思われた。例えば、「観光ボランティア」と「英語観光ボランティア」は一元化し、外国人おもてなし語学ボランティアとの関連をつけていくことも、考えてもよいのではないだろうか。また、観光写真コンクールや配布用の地図“おいしゅうございまっふ”、“文人銘菓”についても、検討を要すると思われる。

さらに、文京区における観光振興の目的やねらいを改めて確認してもよいのではなかろうか。例えば、「文京区の仲間・ファンを増やすこと」と定めれば、そこから豊かな学びと交流が生み出されることも期待されるであろう。

5 国際交流

1 国際理解を育む機会づくり

〔取組状況の評価〕

姉妹都市等交流事業や国際交流フェスタなどの事業の参加者に対して、国際理解の促進が図られていることを評価する。また、ホームステイ交換事業やカイザースラウテルン市長杯少年サッカー大会、オリンピック・パラリンピックこども新聞などの事業を通じて、小・中学生年代から国際交流の機会を提供していることを評価する。

〔課題と今後の対応・方向〕

姉妹都市等交流事業の成果について、事業に参加した方のみならず、区内全域に浸透させていくことが必要であるため、その仕組みづくりや情報発信の強化に努めてほしい。また、英語圏との交流について、区民ニーズの把握や効果の検証に努めたうえで、慎重に検討していくことも重要である。

さらに、日本人が外国人に対して日本の文化などを正しく伝えることができるよう、子どもの頃から日本の文化、地域の文化に関する知識を習得させ、発信していく人材を育てることが必要である。

2 外国人が快適に過ごせる環境づくり

〔取組状況の評価〕

配布物の多言語化は重要な取り組みであり、また、外国語版の観光リーフレットは好評で、訪日外国人観光客や地域住民への配慮がされていることを評価する。外国人おもてなし語学ボランティア事業も時代のニーズに合っており、参加者が多い点も評価する。

〔課題と今後の対応・方向〕

文京花の五大まつりなどのイベントには、多くの訪日外国人観光客が訪れるため、学生や社会人ボランティアの活用を促進し、通訳サポート等を充実させる必要がある。また、英語観光ボランティアについては、観光ボランティアとの交流を強めることで、内容の充実を図るとともに、スクラップアンドビルドの観点を考慮することも重要である。

在日外国人の国籍内訳は変化しており、英・中・韓以外の言語への対応も検討してほしい。

【国際交流分野評価の総括】

文京区アカデミー推進協議会副会長（学識経験者）

国際交流分野担当 久松 佳彰

現状において、アカデミー推進課内の国際交流担当と観光担当の業務については、もう少し工夫をした住み分けが必要であると思われる。一例として、国際交流担当は、区民及び昼間区民へのサービスに焦点をあてることとして、具体的には姉妹都市との交流の重層化、教育との連携、国際交流フェスタなどのイベントなどを行い、観光担当は、区主催のイベントへの外国人来場者への対応など、観光関連の催事を担当した方が住み分けとしては良いと思われる。

また、今後は外国人の構成が、東アジアから東南アジアの国々により傾いていくことが予想されるので、これに対する対応を準備していくことが望ましいとの意見が議論で出され、至極もつともであると思われた。特に、安全・安心を担保する防災の情報発信が、多言語で可能となるような備えが必要であろうと思われる。

さらに、事業を実施するだけでなく、区内の学校や民間主体での国際交流が一層進展させることも必要である。そのためには、街での人の流れや学校（小学校から大学まで）での国際化の推進状況など様々なデータを収集し、それをプレスリリースなどで発信することにより、呼び水をつけていくことも重要であろうと思われる。

横断的施策

I 情報の収集・共有・発信

〔取組状況の評価〕

昨年度に比べて、広報メディアや方法がかなり改善されてきた。しかし、領域ごとにバラつきがあるという課題は依然として残っている。

〔課題と今後の対応・方向〕

幅広い世代、多様な人々に対する事業の啓発は永遠の課題である。区の事業で生じた活動をいかに継続してもらうか（教室→クラブ、自己学習→ボランティアなど）、コミュニティ活動を維持していくかが課題である。また、区との提携団体から区民へのアピールをいかにするかも課題である。

今後もSNSを活用した情報発信を行っていく中で、技術の発達に遅れないようにするとともに、従来からの広報手段も充実させていく必要がある。

II 協働する人材の育成

〔取組状況の評価〕

区民自らが講師となる講座や、スポーツ推進委員が行うボッチャなどの障害者スポーツ教室など、区民がお互いに学びあう活動が浸透してきている。

〔課題と今後の対応・方向〕

若い世代へ向けてボランティア情報を発信する文京バックアップーズは、新たな試みとして評価できる。現在は、区が活動内容を主導する取り組みになっているが、今後は、大学側、学生（若者）側の状況を踏まえた参加型活動へと修正をしていってほしい。

III 東京 2020 オリンピック・パラリンピック

〔取組状況の評価〕

観光案内標識やリーフレットにおける多言語表記や、コミュニティバス「Bーぐる」ルートマップの英語版の作成など、東京 2020 大会を見据えて実施されており評価できる。

〔課題と今後の対応・方向〕

東京 2020 大会に向けて、様々な分野で他部署や関係機関との調整、連携を取りながら、東京 2020 大会以降、どのように諸活動を総括、終結させ、何を継承するのかを考えていく必要がある。

【総 評】

文京区アカデミー推進協議会会長（学識経験者）
水越 伸

平成 28 年度に課題としてあがっていた大学との連携不足、広報活動の整備については、かなり改善された。もともと数多くの事業を行っているが、東京 2020 大会に向けて新たな試みが加わるなか、全般的にはよくやったと評価できる。ただし広報活動については、たえずメディア環境の変化に対応していくこと、区民目線の広報に転換することなどが、依然として求められる。

中長期的な見通しについて述べておく。このところ事業数が順調に増えていることは、公共事業体として活発に活動している証であり、評価すべきことではある。しかし、現状は増えるばかりで減らす部分がほとんどなく、このままでは数が多くなりすぎて、いずれ立ち行かなくなる危険性がある。具体的には、職員が新規事業の企画開発や、個別事業に丁寧に対応する機会が減り、情報メディアの進展や区民の国際化など新しい社会情勢などに対応する余力を持てなくなることが考えられる。そのようにならないため、各種事業展開について抜本的に体制や方針を検討する時期にきている。とくに東京 2020 大会は大きな節目であり、それと合わせてぜひ検討していくべきである。

【参考】

文京区アカデミー推進協議会委員名簿（平成29～30年度）

	分野	氏名	団体名・役職等
1	学識経験者	水越 伸	東京大学大学院情報学環教授
2	学識経験者	久松 佳彰	東洋大学国際学部国際地域学科教授
3	学識経験者	田中 雅文	日本女子大学人間社会学部教育学科教授
4	生涯学習関係団体	増田 純	文京アカデミア講座選定委員会 前期委員会 委員長
5	生涯学習関係団体	塩見 美奈子	文京区生涯学習サークル連絡会 代表
6	スポーツ団体	井上 充代	文京区スポーツ推進委員会 会長
7	スポーツ団体	奥村 透	文京区体育協会 副理事長
8	文化・芸術団体	高澤 芳郎	シエラ・ウインド・オーケストラ 事務局長
9	文化・芸術団体	牧野 恒良	公益社団法人 宝生会 事務局長
10	観光団体	白井 圭子	文京区観光協会 副会長
11	観光団体	荒木 時雄	公益財団法人 東京観光財団 常務理事
12	国際交流団体	佃 吉一	公益財団法人 アジア学生文化協会 常務理事
13	区民	海藤 早希子	区民公募委員
14	区民	黒木 美芳	区民公募委員
15	区民	佐藤 美智子	区民公募委員
16	区民	町田 菊男	区民公募委員